

学位論文要旨

| | |
|-------|---|
| 氏名 | 伊藤宏之 |
| 論文題目 | 板碑と中世東国社会 |
| 形式 | 【 A4 】判 【 202 】頁 400字詰原稿用紙の場合【 563 】枚 |
| 目次 | <p>序章</p> <p>第1章 「板碑」の成立</p> <p>第2章 板碑と造立者</p> <p> 第1節 東国武士を供養した板碑</p> <p> 第2節 家族を供養した板碑</p> <p> 第3節 「位牌」と呼ばれた板碑</p> <p>第3章 板碑にあらわれた信仰</p> <p> 第1節 板碑にみる善光寺信仰</p> <p> 第2節 板碑にあらわれた民間信仰</p> <p>第4章 板碑の製作</p> <p>第5章 板碑の生産と流通</p> <p> 第1節 武蔵型板碑の生産と流通</p> <p> 第2節 葛西城址出土板碑群にみる板碑製作</p> <p>第6章 板碑の諸相</p> <p> 第1節 東京低地東部における題目板碑の様相と製作</p> <p> 第2節 「基部銘」を有する板碑</p> <p> 第3節 墨書銘板碑について</p> <p>第7章 板碑の伝世資料研究</p> <p> 第1節 所在地を離れた板碑</p> <p> 第2節 逸亡資料の復元と収集資料の活用</p> <p> 第3節 浅草寺に関する資料の伝来</p> <p>終章</p> |
| 論文の要旨 | <p>本論では、関東地方に濃密に分布している板碑（武蔵型板碑）をもとに中世東国史、なかでも在地における民衆の信仰の受容と変容、板碑の生産・流通の実態について究明することを目的とする。同時に、各博物館や大学、寺社といった諸機関に収蔵されている収集資料・未検討資料を、歴史資料として活用するための手法について検討を行い、その有用性を明らかにする。</p> <p>東国における中世史料は、西国に比べて非常に少なく、まとまった史料群を所蔵する寺社もあるが、それは極めて限られている。そのなかで板碑は、中世人が自身の手で造立したものであり、在地における信仰生活の実態を明らかにするだけでなく、商品経済や流通史を解明する資料となり得る。さらに5万基を超える膨大な造立数は、東国に残存する文献史料のそれを大きく上回り、在地における当時代の中世資料として大いに注目される。よって、板碑は東国の中世史研究では欠くことのできない史料のひとつといっても過言ではない。</p> <p>板碑は宗教遺物であり、刻まれた本尊や銘文は文献史学や仏教学、宗教学の研究対象となる。一方で、板碑自体は物質資料であり、考古学や美術史学、建築史学の研究対象となる。このように、</p> |

板碑は様々な資料的性格を帯びていることから、これを資料として中世東国史の一面を読み取るためには、多様な視角からのアプローチと分析が必要である。これまでも文献史学や考古学など、多方面からの研究が重ねられてきているが、それらの多くは、各研究者の立脚する学問分野からのアプローチであり、諸分野を横断しての「総合的」な研究は少なく、分析の方法も十分確立しているとは言い難い。よって本論では、文献史学からの検討と考古学的検討とを併用し、多角的に考察することとする。

また、板碑は地域に根差した資料として、文献史料などでは得られない資料的価値を有している。そのため、従来の研究対象となってきたものは、各地域に所在するものがほとんどで、博物館や大学などの公的機関や個人コレクションとして収集された資料は、研究対象から外され等閑視されてきた。しかし、原位置を離れた資料であっても、中世の資料であることに違いはなく、同時に、こうした資料は膨大に存在している。

よって本論では、これらの未検討資料を地域史の中へ位置付ける必要性を明らかにし、従来、分析・検討対象として取り扱われることの少なかった、収集資料の「資料化」と活用の手法を探る試みを行う。

本論は、全7章から構成される。第1章から第3章では、板碑の銘文や本尊の検討から板碑の性格、機能を考える。第4章から第6章では、考古学的な見地から、板碑の生産と流通について考察する。さらに第7章では、板碑の伝来を明らかにすることで、所在地を離れた板碑を地域史資料として活用する手法について考察する。

第1章では、最古の板碑とされる、嘉禄3年(1227)銘板碑が出現する前夜の様相について考察する。これは、板碑の源流の考え方にも深く関係している。近年、12世紀以前の木製塔婆の出土が相継ぎ、とくに野々江本江寺遺跡(石川県珠洲市)から出土した「木製板碑」は本尊や銘文が残存しないものの、形態が「板碑形」を呈することから、石造板碑の源流と評価する向きも強い。しかし、こうした評価はあくまでも一面的な見方に過ぎないと考える。

そこで、従来の板碑の源流に対する考え方を、再整理するとともに、定型化した板碑が出現する嘉禄3年以前の石造物のあり方について、有銘資料を中心に考察を加える。そして、定型化した板碑の出現前夜の様相を明らかにする。

第2章では、銘文にあらわれた人名や造立趣旨などを手掛かりに、板碑と造立者との関りを取り上げ、板碑を介した供養の在り方を明らかにする。

第1節では、関東各地に散在する東国武士の名を刻む資料を縦覧し、人名表現を中心にその在り方と変遷を検討する。人名の表記には、大きく俗名と法名があり、その表記の変化は、故人供養のあり方と密接に関係すると考えられる。

第2節では、法名で表記された造立者を考える試みとして、「西仏板碑」(台東区・浅草寺)を例に考察する。造立当時の社会的、地理的状況を確認しながら、西仏という人物の特定に努める。また、西仏板碑の特殊性についても言及する。

第3節では、「位牌」銘を有する阿波型板碑を手掛かりに、板碑の機能が多様化していく様子を明らかにする。板碑は15世紀から墓標化が顕著となるものの、その始源はさらに遡ると考えられる。「位牌」銘板碑は、こうした機能の転換期に出現した可能性がある。さらに位牌との関係を、中世禅宗による「清規」の影響を視野に入れつつ明らかにする。

第3章では、板碑から在地における信仰の展開を考える。

第1節では善光寺信仰を取り上げる。新たに発見された建長4年(1252)銘資料を通じて、13世紀後半の関東地方における善光寺如来像を刻む板碑を概観し、地理的分布からみた特徴と造立者の信仰的背景を探る。続いて、「善光寺時供養」と刻まれた2基の16世紀の結衆板碑に注目する。鎌倉時代に盛行した善光寺如来像の制作も、南北朝末頃から江戸時代にかけては遺例にとぼしく、

関連する資・史料も少ない。「善光寺時供養」板碑の検討を通して村落での信仰のあり方を明らかにする。

第2節では、民間信仰板碑の銘文から、信仰主体の変化、村落における民間信仰行事の成立について考察する。地縁的な信仰集団が造立した「民間信仰板碑」は、15世紀中葉になって成立し隆盛するが、その源流は、在地における經典供養や念仏供養などの信仰行事にあると考えられる。当初は、僧侶が中心であった信仰行事が、やがて民間に受容される過程を、板碑銘文の分析から究明する。

第4章から第6章では考古学的な視点から、板碑の生産と流通について考察する。

第4章では、板碑の製作工程を明らかにする。とくに、これまで取り上げられてこなかった、東京低地部を中心に検討を行う。また、茨城県南西部から千葉県北西部の資料にも目を配りつつ、当該地域における板碑の製作工程を検討し、その工程の復元モデルを提示する。

第5章では、板碑の生産と流通について、浅草寺遺跡や葛西城址（葛飾区）の出土資料をもとに分析、考察する。

第1節では、隅田川下流域における浅草寺型蓮座板碑の存在を明らかにし、東京低地部における板碑の生産と流通の実態を具体的に示す。同時に、この同形板碑が出現した背景についても言及する。

第2節では、葛西城址から出土した板碑群について検討する。まず板碑の本尊と蓮座に注目し、それらを分類することで板碑群の特長を明らかにする。さらに、東京低地部における板碑の製作と需給関係の動向についても考察する。

第6章では、題目板碑、基部銘、墨書銘といった特徴的な資料の分析を通じて、板碑の製作及び生産と流通に関する実態を、具体的に跡付ける。

第1節では葛西城址出土の題目板碑群に注目する。その中には、特徴的な本尊配列をしたものが多数確認でき、それらの分布と教団の拡張との間には密接な関係が想定できる。そこで、この特有の題目板碑を分析し、その背景に、江戸川・中川下流域での日蓮教団による教化活動の可能性を指摘する。さらに、局地的に分布する状況から、これらが当該地域で製作され流通した可能性を論じる。

第2節では、辻字宮地1遺跡（川口市）から出土した「基部銘」板碑について、他の事例を交えて分析する。そして基部銘の彫刻が、板碑製作の過程で行われたことを明らかにし、その意味を検討する。

第3節では、近年発見した寛正5年（1464）銘阿弥陀一尊種子板碑（横浜市）をもとに、墨書銘のあり方から、板碑製作者（工人）の作業分担、役割について見方を論じる。

第7章では、板碑を歴史資料として活用する取り組みのひとつとして、伝世資料や博物館・大学などが保有する資料の活用に向けた検討を行う。

第1節では、元の所在を離れた板碑について、足立区での事例を踏まえて、検討の成果を明らかにする。かつて足立区内に所在した板碑が、早稲田大学會津八一記念博物館に収蔵されていることを突き止めたことから、来歴不明となっていた所蔵資料が、過去の調査資料と突合することで、その出所、来歴が跡付けられることを指摘する。

第2節では、千代田区における悉皆調査の成果を基に、失われた資料群の復元を試みる。千代田区には現存する板碑が少なく、本格的な調査は実施されていなかった。そこで区内の板碑の悉皆調査だけでなく、区内旧在の資料についても存否の確認を行う。同時に、失われた資料も近世・近代の文献を探索する中から抽出することで、その全容を復元する。さらに、大学や博物館などが所蔵する、来歴不明の資料の扱い方について検討を行う。原位置を失って資料的価値が減じたと等閑視されている収集資料を「資料化」し、その伝来を明らかにすることで一次資料化が可能であり、こ

うした活用の有効性についても言及する。

第3節では、浅草寺での調査成果を取り上げる。従前、浅草寺の歴史は、ごく限られた文献史料をもとに叙述され、そうした中で考古資料の存在は貴重である。浅草寺遺跡では、たびたび発掘調査が実施されてきたが、断片的な概要報告に留まっていることから、浅草寺遺跡から出土した板碑などの考古遺物を、調査ごとの時系列に沿って整理し、歴史資料として活用する道筋を示す。

以上、本論では、板碑の定義と源流について見解を示し、銘文の検討から中世東国の在地社会における人々の供養の変化と信仰の変容を跡付ける。また、考古学的な分析と検討によって、板碑の生産と流通の実態を解明し、中世東国における流通史の一端を明らかにした。さらに、所在地を離れた未検討資料の「資料化」と活用に向けた方法論の確立に見通しを付け、東國中世史の解明のために、こうした基礎的作業の必要性和研究の有効性を明らかにした。